

(第2回 午前)

2019(平成31)年度適性検査問題

適性検査Ⅰ

(実施時間：45分)

《注 意》

- (1) 問題は 1 のみです。
- (2) 解答はすべて解答用紙に書いてください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに書いてください。
- (4) 解答用紙のみ回収します。

城西大学附属
城西中学校

1 次の文章を読み、あとの問に答えなさい。

一、

子細に見ていくと、雑談には四つのタイプがあることが分かります。マトリクスを使って、そのことを説明していきます。縦軸が「他人優先」「自分ファースト」、横軸が視点が「面白い」「面白くない」というマトリクスをつくります。

「他人優先」「面白い」のゾーン①に入るのが、雑談の①。仕事ができる人は、ほとんどが該当します。視点が鋭く、かつ相手を喜ばせる話をします。自分も雑談を楽しみ、いつも結果を出し続けています。

「他人優先」「面白くない」のゾーン②に入るのが、②。仕事ができないわけではないですが、もう一歩というところで足踏みしています。足りないのは、独自の視点。もっと雑談力を磨いていくと、コンスタントに結果を出せるようになります。

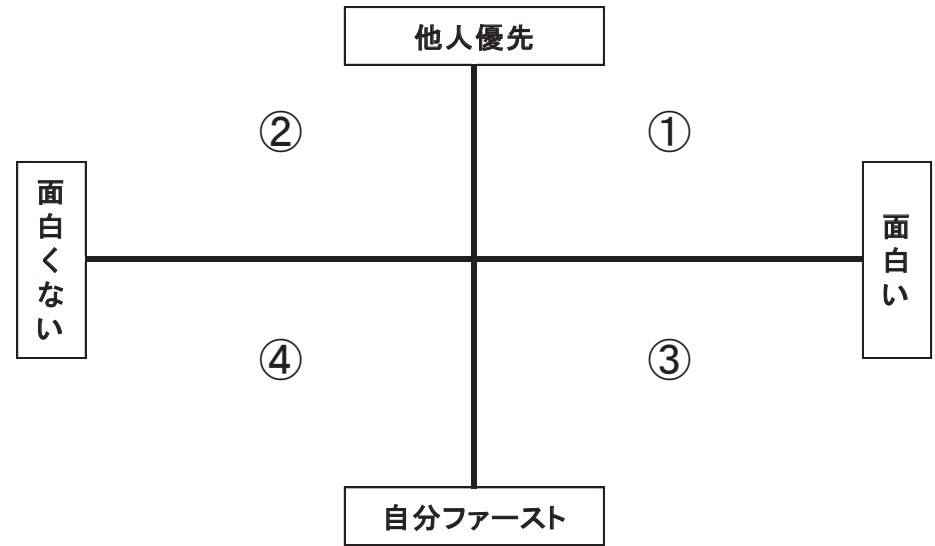
「自分ファースト」「面白い」のゾーン③に入るのが、③。雑談はうまいほうですが、自分の興味があることを優先したりして、相手に喜んではもらえません。足りないのは、利他性。なかなか結果が出ないことが多く、スキルを上げようとしますが、それよりは相手に喜んでもらえる雑談をしていくほうが、殻^{から}を破れるものです。

「自分ファースト」「面白くない」のゾーン④に入るのが、④です。ただのおしゃべりか、雑談をムダだと考えている人が該当します。いずれも相手のことを考えていないので、なかなか結果には結びつきません。相手を喜ばせる話をする、視点を変えていくなどの取り組みが必ず要です。

雑談力のレベルで言うと、この四つは上から順に①↓②↓③↓④になります。あなたはどのゾーンに入るでしょうか。

①なら言うことはないですが、もし②や③、④のゾーンだとしても、雑談力を高めていけばいいだけです。④のゾーンにいる人でも、あきらめるのは早いです。

雑談をする人の4つのタイプ



私が留学したイギリスのケンブリッジ大学には、独特の習慣があります。それは、¹午前と午後の二回、大学内の一室に集まって、教授たちがお茶をするのです。

私も指導教官から時間の許す限り、参加するように言われていました。これは、何百年と続く、ケンブリッジの伝統です。

^{※そうそう}錚々たる教授たちが1カ所に集まって何をするのかと言えば、「雑談」です。しかも一日に二回も……。

「ケンブリッジの先生はよほどヒマなんだな」

そう思う人がいるとしたら、雑談力を過小評価しています。確認したわけではないのですが、おそらくその雑談の時間で人類史上に輝く研究がいくつも生まれたはずです。私はそう信じてやみません。

イギリスには、もともとお茶を飲む伝統があります。それにならったのかもしれませんが、ケンブリッジのその部屋にはお茶やビスケットが用意されていて、^{※めいめい}錚々たるメンバーが銘々に

味わっていました。

そこには学部の垣根を超えて、多くの教授たちが集まってきました。たまたま隣にいる人や近くの人と、仕事を忘れてしばし雑談をします。

「最近はこのことを研究しています」

「〇〇についてはどう思いますか？」

「なるほど、そういう見方もあるんですね」

そうして三十分くらい雑談をしたあとに、それぞれの研究室に戻っていきます。自分とは専門の違う人たちと話をすることで、リフレッシュできたり、また自分の研究のヒントをつかめたりした人が多かったような気がします。

どんなに忙しくても、このお茶の時間をつくる。いいえ、忙しいからこそ、お茶を飲んでいただくのです。まさに忙中閑あり。※ぼうちゆうかん

ゆったりと雑談すると、脳内にある「デフォルトモードネットワーク」が作動します。このデフォルトモードネットワークは何か集中して取り組んでいるときには、働きません。どちらかというと、リラックスして何も考えていないときに活動します。

仕事や勉強をしているとき、ある特定の脳の回路が使われています。やればやるほど、その回路は強くなっていきます。逆に言うと、それ以外の回路は、使われなくなります。できる人はその回路が太くなっているとも言えますが、その一方で、その特定の回路以外は使われなくなってしまうのです。

脳には無限とも言える回路が存在するのに、特定のもののだけが機能していると、ほかのものが機能しなくなります。脳の可能性を毀損きそんすることにもなるので、これはとても残念なことです。

それを補うのが、このデフォルトモードネットワークという存在です。デフォルトモードネットワークは、「ネットワーク」という言葉があるとおり、脳のさまざまな回路が結びついて生まれます。

このときふだん使わない回路をつくったりつなげようとしていたりします。新しい回路が生まれる可能性があるということです。

「そういう考え方もあったのか！」

「なるほど、こういうことか！」

新しい回路がつけられれば、アイデアがひらめいたりします。

それは、脳がリラックスしてデフォルトモードネットワークが作動しているからです。それが、可能になるのは、脳がリラックスしているときです。

（茂木健一郎「最高の雑談力」）

注

錚々たる…特別にすぐれているさま

銘々…ひとりひとり。それぞれ。

忙中閑あり…忙しい中にも、わずかなひまはあるものである、ということ。

毀損…ものを壊すこと。利益などをそこなうこと。

二、

どんな仕事においても、さりげなく雑談ができ、そのなかでちょっと気の利いた話ができる
と、コミュニケーションがうまくいきます。

話が面白いということは、人を楽しませたり、喜ばせたり、励ましたり、感動させたりできます。人を幸福にすることができる。ユーモアのセンスがある人がいると、場がどんどん盛り上がって、楽しいときを過ごせる。そこで喜びを感じたり、あるいは仕事がうまくいったりということがあると、幸福感が増すわけです。

知識がたいへん豊富で、もの知りなんだけど、会話していてもなぜか面白くないとなると、これはいささか魅力に欠けます。その原因はどこにあるかという²と、相手の文脈に乗りうつる「文脈力」の欠如^{けつじょ}なのではないかと思えます。

会話とは、相手と仲良くなるためのもの、揉め事を起こさないようにするためのものです。とくに雑談はそうで、会話における柔軟性が非常に重要です。

とくに国際社会になりますと、相手の方がどんな価値観で生きているか、わからないわけで

す。聞きながら、「その人の価値観はどのようなものなのか」「NGワードは何なのか」を感じとりながら、会話や質問をしてうなずいたりしていく。

「パーティーのような席が苦手です。初めて会う人とどうやって会話をしたらいいか、きつかけがつかめません」

こういうタイプの方は日本には少なくないでしょう。

A、そんなに身構えることはありません。そのパーティーに呼ばれたということは、その文脈でつながっている人が必ずいるわけです。

「今日はどういう経緯でこのパーティーに来られたんですか？」
と聞くと、

「〇〇さんのお誘いです」

「私は△△の知り合いで」

こんなふうには、人とのつながりが見えてきます。あなたにもあなたを呼んでくれた人がいる。よっぽど大勢集まったパーティーでもない限り、そうやって聞いていくとだいたい知り合いの知り合いに、何かつながりが見つかるものです。

それをきっかけにして、

「どんなお仕事をされているんですか？」と当たり障りのない質問をしていきながら、会話の糸口をつかんでいきます。相手の人の文脈が少しずつわかってくると、話題も探しやすくなります。

知らない人と話をするというのは、誰しもが多少なりとも緊張するものです。

かといって、旧知の人と話ただけで帰ってきてしまったというのも、せっかく人と出会う場に行きながら、みすみす貴重な機会を逃しています。

パーティーに行ったら、必ず誰か一人新しい人と出会い、打ち解けて帰ってくるということを目標にすると思います。

新しい知り合いを一人増やすことができれば、そのパーティーに来たことに意味が見出せます。しかもその一人と、かなり打ち解けた感じのコミュニケーションができれば、その関係は今後につながるものになるでしょう。

「B」、打ち解けた雰囲気にもでもつていくにはどんな話をしたらいいのか。自分と相手の「共通の文脈」になるのは何かと考えてみるのです。

あるパーティーの席で、知り合いから、

「私の上司です」

と外国人の方を紹介されました。日本語が話せない方でした。出身を聞いたところ、アルゼンチンだといいます。

「アルゼンチンということは、メッシ、マラドーナの国ですね。『ボカ・ジュニアーズ』を知っていますか？」

私は聞いてみました。「ボカ・ジュニアーズ」というのは、アルゼンチンのサッカーチームです。私はサッカー好きなので、アルゼンチンということだとつさに頭に浮かんだのです。

「C」その人は、まさにボカ・ジュニアーズファンだったのです。

しばしボカ・ジュニアーズの話をして、最後に、

「ボカ・ジュニアーズ！」

「ボカ・ジュニアーズ！」

とお互いに叫び合って盛り上がりました。

アルゼンチンやブラジルはサッカー強国ですから、日本以上にサッカーに熱い国です。その出身の男性だったら、サッカーは共通文脈になる可能性が高い、と思っていました。もう一つ「リバー・プレート」という強いチームがあり、ボカ・ジュニアーズがはずれたときにはそれを言おう、と思っていたところ、一発目で話題を共有できる文脈を掘り当てることができたというわけです。

アルゼンチンのサッカーチームという相手の文脈で、相手が馴染んでいる語彙を見つけただけで、何か楽しくコミュニケーションできたという気持ちが残りました。

打ち解け感というのは、こんなことでもいいのです。

（齋藤 孝「文脈力こそが知性である」）

問一 本文中の図の①～④にあてはまる語を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、独りよがりの人 イ、空回りしている人 ウ、雑談に不慣れな人 エ、達人

問二 —— 部1とありますが、なぜそのようなことをするのですか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、ケンブリッジ大学ではだいたい事前に雑談の時間をとることによって研究の効率が上がる
ことが証明されたから。

イ、自分の研究とは直接関係のない話をするので、考えたことのなかった新しいアイデア
アが浮かぶことがあるから。

ウ、お茶をする場所に集まれば、研究に行きづまっている研究者がいたときに、適切なア
ドバイスを与えることができるから。

エ、お茶に含まれる成分が脳内の物質に働いて、新しいアイデアや思考の体力がつくよう
になるという研究成果がでたから。

問三

A

 ～

C

 にあてはまる語として適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で
答えなさい。

ア、では イ、すると ウ、なぜなら エ、しかし

問四 —— 部2とありますが、筆者は相手の文脈の中から見つけるべきものは何だと言っ
ていますか。文中から十一字で抜き出して答えなさい。

問五 あなたはこれから始まる人間関係において初対面の人とどのように接するのがよいと考えますか。一・二の文章をふまえ具体的な方法を提案しながらあなたの考えを四百字以内で書きなさい。ただし、次の条件ときまりを守って書くこととします。

(条件1) あなたの考えは一つにしぼって書くこと。

(条件2) 考えの根拠・理由を書くこと。

【きまり】

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○各段落の最初の字は一字下げて書きます。

○行をかえるのは段落をかえるときだけとします。会話を入れるときは行をかえてはいけません。

○記号も一字と数えます。記号が行の先頭にくるときは、前の行の最後の字と同じます目に書きます。(ます目の下に書いてもかまいません)

○段落をかえたときの残りのます目は字数として数えます。

○最後の段落の残りのます目は字数として数えません。

